

〈見まく欲る〉の考察

——呪詞から歌語へ——

島 田 修 三

1

古代歌謡を根生いとする表現が万葉へと継承されて行く場合、表現それ自体には何らの変化も及ばぬものと、新たな表現に変成を遂げて行くものと二通りがある。古代歌謡の表現は本来、古代呪術的幻想と不可分の言語様式であるものが大半を占めているはずだが、いうまでもなくその幻想を支えるのは歌謡を伝誦した〈場〉だということになる。つまり、それらが万葉に継承される場合、〈場〉あるいは歌の発想されるコンテクストが類似しており、それが或る程度、慣用的に限定されると、表現に変化は及びにくいといえよう。したがって、変化して行く表現は、その逆を考えればいいかと思う。〈場〉や発想のコンテクストが古代歌謡のそれらと乖離してしまう。すると、その表現はいわば言語の伝承的範列としての範囲を狭めて行き、同時に新たな万葉和歌的幻想が付加されて行く。こうした逆方向のベクトルが表現それ自体の中で働くと、それは新しい幻想を示す言語様式へと変成して行くのである。

本稿で問題とする〈見まく欲る〉という詞章は、前記二通りのうち、後者の場合から生じた典型的な表現といつていいかと思う。おそらく、その祖型は〈見が欲し〉という詞章であり、記紀にはわずかに二例残るだけに過ぎない。また万

葉にも一四首一四例数えられるが、記紀歌謡と相似的な〈場〉やコンテクトから逸脱した発想や用法の例はきわめて少ない。〈見が欲し〉についてはすでに別稿で検討したが、重複の煩をいとわずに、記紀に収録された二例について少し触れてみたい。

つぎねふや 山城川を

宮上り 我が上れば

青土よし 奈良を過ぎ

小楯 大和を過ぎ

我が 見が欲し国は

葛城高宮 我家のあたり (記58・紀54)

大和辺に 見が欲しものは

忍海の この高城なる 角刺の宮 (紀84)

記58は仁徳記(紀)において皇后イワノヒメが歌ったという所伝のある歌謡であるが、その所伝と歌謡の内容とに明らかな矛盾があり、その出自実体の不明瞭な歌謡といえる。問題を当該詞章に絞りこんでいくと、山路平四郎氏は本歌を上四句と下八句とが別個の出自とする見解に立って、〈見が欲し〉を含む後者が道行形式および宮廷寿歌紀84を踏まえた国思歌であると指摘し、また土橋寛氏も下三句がいわゆる独立歌謡をそのものを利用したか、もしくはその影響下

にある国見的望郷歌の詞章であろうと指摘している。^④ また清寧紀歌謡紀84は、臨時朝政を忍海の地で執った飯豊青皇女の皇居を（当世の詞人）が歌ったものと所伝にある通り、当時の宮廷寿歌の一つと考えていいだろう。^⑤

両歌謡の実体を以上のようにとらえた上で、〈見が欲し〉の和歌史的な位置を考えると、万葉前史における国讃め・宮讃めの慣用的な表現であり、また広く民間の国見に関わる伝誦呪詞や歌謡を出自として練成を遂げてきた詞章と見ることが出来る。つまり伝誦的な寿詞であるといえる。〈見たい〉あるいは〈見ていたい〉というほどの意味に解すべきこの表現が、宮や国といった対象を讃美する寿詞として固定化したのは何故か。私は、これを別稿で「家郷たる国が、王権の所在地たる宮がそれ以外の存在を相対化してしまう超越的な何ものかをもっており、〈見る〉ことを庶幾することを通じて〈見る〉主体にその何ものかをもたらず。故に、現に目に見えている存在の全てを否定して、国や宮を〈見る〉ことを庶幾するのだというふうを考え」、そこに土橋寛氏のいう古代呪術的幻想「〈見る〉ことのタマフリ」説を援用して、次のような見解を提出して見た。即ち、〈見が欲し〉という詞章は、夥しいクニマタに充ち溢れた家郷たる国や王権の所在地たる宮を〈見る〉ことによつてその盛んなタマと交流・融合したいという庶幾を述べる表現であろうというのである。古代人にとつて王権とは何よりも多くのクニツカミを掌握する存在として観念されたはずであり、また家郷たる国とは祖神の強大なクニタマによつて守護された土地として観念されたであろう。そう考えると、〈見が欲し〉が究極的には対象を讃美してやまない寿詞として固定化された理由の一端が見えてくるのではないか。

先に触れた〈見が欲し〉の万葉における一四の用例の中、八例までが宮・土地・物の讃美であつて、本来的な用法に則つたものといえよう。笠金村の吉野離宮讃歌（6・907、910）における宮讃めの用例、国見歌の系譜につながる山部赤人（3・332四）・丹比国人（3・382二）・田辺福麻呂（6・104七）・大伴家持（17・398五）らの山讃めの用例などが、その典型的なものといえる。いずれも〈見が欲し〉が、その祖型において内包していた古代呪術

的幻想を少なくとも擬制的な背景とした用法と考えられる。しかし万葉時代に出現した全国規模の王権、天皇制を讚美する表現として新時代に慣用化するのには、むしろ白鳳期に人麻呂によって創出された〈見れど飽かず〉という詞章である。〈見れど飽かず〉は〈見が欲し〉の内包する古代呪術的幻想を継承し、より高次の神性王権を讚美する新たな寿詞として登場するのである。この詞章については別稿を参照されたい。

〈見が欲し〉の用法として、本来的なそれから逸脱したと考えられるものは、次の二例である。

ゆくりなく今も見が欲し秋萩のしなひにあらむ妹が姿を (10・二二八三)

うまさけの三諸の山に立つ月の見が欲し君が馬の音そする (11・二五一一)

前者はおそらく奈良天平期の作者未詳歌で秋相聞に、後者は人麻呂歌集所収歌で問答にそれぞれ分類されている。こうした明らかな相聞系列の歌に用いられた例はこの二首だけであり、他の用例のほとんどが讚歌ないしは讚美の文脈に措かれているのは截然と異なる。これらを讚歌と見なすことも出来ないわけではないが、こうした〈見が欲し〉における〈見る〉の意味は、例えば、

見ずもあらず見もせぬ人の恋ひしくはあやなく今日やながめ暮らさむ (在原業平 古今11・四七五)

今のはや恋ひ死なましをあひ見むとたのめし事ぞ命なりける (清原深養父 古今12・六一三)

といった王朝恋歌の〈見る〉のそれとさわめて近い。こうした王朝恋歌における〈見る〉にタマイイ(魂合)を庶幾するといった呪術的幻想の影が完全に払拭されているかどうかは断言出来ないが、少なくとも古代歌謡における家郷や宮を〈見る〉という行為からは遙かに隔たっているだろう。これに対して、前掲の万葉相聞における二例の〈見る〉は、あるいは古代呪術的幻想を範例として引きずっているかも知れぬが、相聞恋歌的表現の文脈の中では業平歌や深養父歌のそれと等質な解釈を可能にする措かれ方をしていえる。〈見が欲し〉という詞章がこうした相聞表現に取り込

まれたという事実は、その慣用的な寿詞として持つ伝承的範列の範囲を狭めて行つたという事であり、また万葉和歌が新たに獲得した相聞的〈見る〉の意味に近づいたという事でもある。しかし〈見が欲し〉の明らかな相聞的用法はこの二例が残るのみであり、後の勅撰集などではこの詞章自体が全く見られない。つまりこの詞章は、いわば新しい和歌的幻想に到達すると同時に、新たな言語様式へと変成を遂げたのである。〈見まく欲る〉という歌語はそこに位置づけられるだろうというのが私の見通しである。

2

〈見まく欲る〉の〈みまく〉は、語法的には動詞〈みる〉の未然形〈み〉に助動詞〈む〉の古い未然形〈ま〉が付き、さらに用言を体言化する接尾語〈く〉が加わつた語形であると一般的には説かれて¹⁰⁾いる。そこに動詞〈欲る〉が付いて〈見が欲し〉と同様に〈見たい〉あるいは〈見ていたい〉と解すべき詞章ということになる。なお、この〈みまく〉に形容詞〈欲し〉の付いた〈見まく欲し〉という表現も後述するように〈見まく欲る〉よりは数は少ないが、それと並行して万葉には用いられており、意味的な相違は全くうかがわれない。万葉歌人の意識においては、次のそれぞれの用例に端的にうかがわれるように、単に表現の便宜上、この両詞章を使い分けたと推定してほぼ間違いない。

恋ひ死なむ時は何せむ生ける日のためこそ妹を見まく欲りすれ(4・五六〇)

春日山朝立つ雲のみぬ日なく見まくの欲しき君にもあるかな(4・五八四)

つまり、体言にかかる場合は〈見まく欲し〉の連体形が用いられるのが、ほぼ原則になっているのである。したがって本稿では、両詞章を同一レヴェルで扱い、用例数の多い〈見まく欲る〉をもって論の前面に出すこととする。

※	卷	番号	分 立	作 者	宮	国(土地)	物	人
1	2	164	挽 歌	大 伯 皇 女				大 津 皇 子
2		207	挽 歌	柿 本 人 麻 呂				我 妹 子
3	3	403	譬 喩	大 伴 家 持				玉(坂上大嬢)
4	4	560	相 聞	大 伴 百 代				妹
5		580	相 聞	余 明 軍				君
6		584	相 聞	大 伴 坂 上 大 嬢				君
7		686	相 聞	大 伴 坂 上 大 女				(君)
8		704	相 聞	巫 部 麻 蘇 娘 女				人
9		778	相 聞	大 伴 家 持			籬 の 姿	
10	6	946	雑 歌	山 部 赤 人				(妹)
11		984	雑 歌	豊 前 国 娘 大 豊			月	
12		1014	雑 歌	橘 文 成				君
13		1062	雑 歌	福 麻 呂 歌 集	味 原 宮			
14	7	1104	雑 歌	作 者 未 詳		吉 野 川		
15		1205	雑 歌	作 者 未 詳		里		
16		1282	旋 頭 歌	人 麻 呂 歌 集			白 雲	
17		1302	譬 喩	人 麻 呂 歌 集				白 玉 (女)
18		1318	譬 喩	作 者 未 詳				白 玉 (女)
19		1364	譬 喩	作 者 未 詳				秋 萩 (女)
20		1318	譬 喩	作 者 未 詳				白 波 (男)
21	8	1516	秋 雑 歌	山 部 王			秋	
22	9	1724	雑 歌	人 麻 呂 歌 集		吉 野 川		
23		1753	雑 歌	虫 麻 呂 歌 集		筑 波 山		
24	10	1913	春 相 聞	作 者 未 詳				君 が 姿
25		1943	夏 雑 歌	作 者 未 詳			ほ と と き す	
26		2124	秋 雑 歌	作 者 未 詳			秋 萩	
27	11	2381	正 述 心 緒	人 麻 呂 歌 集				君 が 目
28		2464	寄 物 陳 思	人 麻 呂 歌 集				三 日 月 (恋 人)
29		2559	正 述 心 緒	作 者 未 詳				我 妹 子
30		2592	正 述 心 緒	作 者 未 詳				(恋 人)
31		2666	寄 物 陳 思	作 者 未 詳				妹 が 目
32		2682	寄 物 陳 思	作 者 未 詳				君
33		2793	寄 物 陳 思	作 者 未 詳				妹
34		2801	寄 物 陳 思	作 者 未 詳				君
35	12	2992	寄 物 陳 思	作 者 未 詳				君
36		3024	寄 物 陳 思	作 者 未 詳				妹 が 目
37		3106	寄 物 陳 思	作 者 未 詳				(我) と 君
38	15	3776	相 聞	中 臣 宅 守				(狭 野 弟 上 娘 子)
39	17	3957	挽 歌	大 伴 家 持				弟
40	18	4120	雑 歌	大 伴 家 持				君
41	20	4307	相 聞	大 伴 家 持				(織 女)
42		4449	雑 歌	船 王				君

さて、この詞章の用例は万葉集に四二首四二例（長歌五首、短歌三六首、旋頭歌一首）が数えられる。そのうち〈見まく欲る〉が二八例、〈見まく欲し〉が一四例ということになる。前頁にその一覽を表示したが、右四つ（の〈宮〉〈国〉〈土地〉）〈物〉〈人〉という項目は〈見まく欲る〉の対象を前稿までの私の方法に従って便宜的に大別したもので、その具体を欄内に明示した。また左端※欄に記した通し番号は、以下、本稿の引用する歌の所屬を示す指標とする。表に明らかのように、この詞章は相聞系列の歌（正確な分立を記すと、相聞・譬喩・春相聞・正述心緒・寄物陳思・問答歌）に多く用いられているという事実にまず注目される。四二例中、二五例を数える。これを分立だけでなく、措かれた文脈においてとらえ直すと1・2・39の挽歌における用例も相聞系列に入るであろう。

1 見まく欲りわがする君もあらなくに何しか来けむ馬疲るるに

2 天飛ぶや 軽の路は 吾妹子が 里にしあれば ねもころに 見まく欲しけど 止まず行かば 人目を多み まなく

行かば 人知りぬべみ さね葛 後も逢はむと 大船の 思ひ憑みて……

39 天離る 鄙治めにと 大君の まけのまにまに 出でて来し われを送ると 青丹よし 奈良山過ぎて 泉川 清き

河原に 馬とどめ 別れし時に 真幸くて 吾帰り来む 平けく 斎ひて待てと 語らひて 来し日の極み 玉梓の

道をた遠み 山川の 隔りてあれば 恋しけく 日長きものを 見まく欲り 思ふ間に……

言うまでもなく、いづれも愛する者の死を悼む歌であるが、〈見まく欲る〉〈見まく欲し〉をその近辺の文脈で切り取って見れば、紛れもなく相聞的用法なのである。相聞表現と挽歌表現との位相が同質であることは多くの論者によって指摘されているが、これらもまた例外ではない。さらに分立は雑歌であるが、10における用例も次のようにきわめて相聞的であるといえる。

10 御食向ふ 淡路の島に 直向ふ 敏馬の浦の 沖辺には 深海松採り 浦廻には 名告藻刈る 深海松の 見まく欲

しけど 名告藻の 己が名惜しみ 間使ひも 遣らずてわれは 生けるともなし

これは〔敏馬の浦を過ぐる時に、山部宿禰赤人の作る歌一首〕と題詞にある歌だが、窪田空穂が『万葉集評釈』で指摘するように、人麻呂の石見相聞歌（2・1311～1319）を意識しての作品と思われる。〈見まく欲しけど〉の対象は反歌にある〈君〉であると考えるのが自然である（この反歌の〈君〉や10の〈己が名惜しみ〉といった表現から考えると、赤人はこの長・反歌を旅にある女性の身に仮託して歌ったものであろう）。

以上のように、全用例四二の中、二九例までが相聞的な文脈中に措かれている。これは〈見が欲し〉の内包する古代呪術的幻想を擬制化させながら新時代の寿詞として創出された〈見れど飽かず〉の用例の約八〇パーセントまでが、宮讃め・国（土地）讃め・物讃めに用いられている事実と対照的な傾向を示している。先述したように、〈見が欲し〉の場合も相聞表現にはほとんど及んでいない。あくまでも伝承的な寿詞としての慣用的用法から逸脱していない。こうした点から、〈見まく欲る〉をいわば万葉相聞における固定的な歌語としてとらえて行くことが出来るように思う。そのことを作者および作歌圏から考えて行くと、興味深い事実が一覧表から読み取れるのである。この詞章の用例を最も多く残しているのは大伴家持で、五例ある。さらに4の大伴百代、5の余明軍、6の大伴坂上郎女、7の大伴坂上大嬢、8の巫部麻蘇郎女¹²などの歌の〈場〉は大伴家持ないしは大伴家との直接的関わりによって作り出されたものである。その意味で、大伴家作歌圏内の歌であるといえよう。また40の船王の歌の〈場〉も大伴家持とゆかりの深い橘奈良麻呂邸の宴席にあり、家持も臨席していたし、また何よりもこの歌を家持が自らの歌日誌に記しとどめていることは見逃せないだろう。また巻十の24～26、巻十一の29～34、巻十二の35～37といった奈良朝歌群もその編集の問題を視野に入れた場合、広い意味で大伴家作歌圏に連なるものと考えられることも出来よう。

〈見まく欲る〉の最も早い時期の用例は1の大伯皇女作歌ないしは2の人麻呂作歌、16・17・22・27・28の人麻呂歌

集所収歌のあたりに置くのが自然だろうが、この詞章に習熟し慣用化させたのは大伴一族およびそこに連なる天平貴族であったと見通すことが可能である。そして大伴坂上郎女が典型的にそうであるように、この一族が主として歌い残したのは相聞ないしは社交の〈場〉における相聞的贈答であった。例えば、王朝和歌にも継承されて行く〈待つ恋〉〈片恋〉といった相聞の主要なテーマは大伴坂上郎女を中心とする作歌圏ですでに育ち流行していた事実を伊藤博氏が指摘しているが、〈見まく欲る〉もそうした圏内で展開された相聞歌語と私は考える。後でも触れるように、そこには〈見が欲し〉が持つた寿詞としての意味はほとんど払拭されており、この詞章はもっぱら恋情表出に関わる歌語としての方向に慣用化されて行ったものと思われるのである。

3

それでは、その相聞に用いられた〈見まく欲る〉について考えて見よう。まず〈見が欲し〉の相聞におけるわずかな用例と比較すると、その決定的な差異はこの詞章の恋情表出語としての表現内部における位置に認められる。

4 恋ひ死なむ時は何せむ生ける日のためこそ妹を見まく欲りすれ

7 このころは千歳や往きも過ぎぬるとわれやしか思ふ見まく欲れかも

8 梓縄の永き命を欲りしくは絶えずて人を見まく欲れこそ

29 昨日見て今日こそ隔て吾妹子がここだく継ぎて見まくし欲しも

30 恋ひ死なむ後は何せむわが命生ける日にこそ見まく欲りすれ

41 秋といへば心そ痛きうたて異に花になそへて見まく欲りかも

〈見まく欲る〉が結句に措かれた用例である。和歌の表現構造における形式的な側面からいえば、下二句、特に結句

は一首の主題部と見なければならぬ。その点をそれぞれその歌意から考えて行くと、どうなるだろうか。いうまでもなく、どの歌も恋する者をひたすら〈見たい〉〈見ていたい〉、つまり〈逢いたい〉という心情表出そのものに歌のテーマを置いていることは確かであり、〈見まく欲る〉は文字通りその核心を担う表現ということになる。極言すれば、結句に至るまでの語句は、例えば巻十一の寄物陳思歌の多くがそうした構造をとるように、主題表現〈見まく欲る〉の序に近い働きをするのみの表現と見なすことも出来る。〈見まく欲る〉が大伴家作歌圈を中心として慣用化されて行つた詞章であることを先に述べたが、慣用化とは換言すれば類型化ということでもあろう。これらの歌は主題部に最も類型的な表現が措かれ、導入部・提示部にむしろ個性的（正確には個別的か）とでもいうべき表現が措かれるといった構造を示している。これは〈見まく欲る〉という詞章が和歌様式を支える歌語として広く共同化していた事実を明らかにうかがわせるものである。

5 あしひきの山に生ひたる菅の根のねもころ見まく欲しき君かも

6 春日山朝立つ雲のぬ日なく見まくの欲しき君にもあるかも

12 前日も昨日も今日も見つれども明日さへ見まく欲しき君かも

24 見渡せば春日の野辺に立つ霞見まくの欲しき君が姿か

28 若月のさやにも見えず雲隠れ見まくそ欲しきうたてこのころ

34 大海の荒磯の渚鳥朝な朝な見まくの欲しきを見えぬ君かも

35 玉櫛懸けねば苦し懸けたれば続きて見まくの欲しき君かも

これらは下二句に〈見まく欲る〉が措かれた例であるが、ここにもほぼ同じことが指摘出来るかと思う。どれも構造的にも、心情表出の点でも主題ないしはそれに準ずる位置に〈見まく欲る〉が措かれてある。

このように〈見まく欲る〉は、万葉和歌史においては夙に歌語としての位置を獲得してしまふと考えられるのであるが、それではそこには〈見が欲し〉のもつた寿詞としての讚美性は失われてしまったのだろうか。

岩根踏む重なる山はあらねども逢はぬ日まねみ恋ひわたるかも (11・二四二二)

あぢかまの塩津を指して漕ぐ船の名は告りてしを逢はざらめやも (11・二七四七)

人皆の笠に縫ふといふ有間菅ありて後にも逢はむとそ思ふ (12・三〇六四)

三首いずれも奇物陳思歌であるが、一首目の〈恋ひわたるかも〉、二首目の〈逢はざらめやも〉、三首目の〈逢はむとそ思ふ〉の各句は相聞的な心情表出の語句であり、万葉の相聞表現ではきわめてありふれたものである。それ故、これらはいずれも相聞歌語と呼ぶべき共同性を獲得していると見なすべきであろう。前掲十二首における〈見まく欲る〉は、こうした歌語と置き換え可能な意味合いしかもたないのではないかと思われる。例えば、4・7・8・29・30の結句には〈恋ひわたるかも〉や〈逢はざらめやも〉や〈逢はむとそ思ふ〉がそのまま、ないしは助詞のわずかな操作により措くことが可能であり、歌意に大きな変化は起きない。例えば、4は〈恋ひ死なむ時は何せむ生ける日のためこそ妹に恋ひわたるかも〉となり、7は〈このころは千歳や行きも過ぎぬるとわれやしか思ふ逢はざらめやも〉となり、また8は〈梓縄の永き命を欲りしくは絶えずて人と逢はむとそ思ふ〉となり、原歌との落差はほとんどないといえる。つまり、これは〈見る〉が〈恋ひわたる〉や〈逢ふ〉といった相聞的な動詞とほぼ等しい意味的位相で発想されているからである。ここには古代の〈見る〉にまつわる「見る」ことのタマフリ」といった呪術的幻想や、さらに〈見れど飽かず〉のような、その擬制すらも想定するのは困難といえよう。むしろそこには万葉和歌における相聞的幻想が新たに付加されたと考えられる方が理解しやすい。したがって、〈見が欲し〉が万葉相聞にほとんど用いられなかつた理由もそこから透視することが出来る。つまり、この詞章は呪術的寿詞の様式として共同化されていたのであり、それが新しい万葉相聞

の歌語として応用されることを阻んだのである。このことは、後の和歌史にも歴然としている。即ち、〈見まく欲る〉は王朝の勅撰和歌集にも用例は見られるが、〈見が欲し〉はごく少数の例外を除いて和歌史から淘汰されて行くのである。前者は歌語として共同化し、後者は呪詞性を払拭出来なかつたのである。

4

一覧表に明らかかなように、〈見まく欲る〉にも宮讚め・国讚め・物讚めの用例が少数ながら見られる。宮讚めの用例はわずかに次の一首中のそのみである。

13 やすみしし わご大王の あり通ふ 難波の宮は 鯨魚取り 海片附きて 玉拾ふ 浜辺を近み 朝羽振る 波の音
 騒ぎ 夕風に 權の声聞こゆ 暁の 寢覚に聞けば 海石の 潮干のむた 浦渚には 千鳥妻呼び 葭辺には 鶴が
 音とよむ 見る人の 語りにすれば 聞く人の 見まく欲りする 御食向ふ 味原の宮は 見れど飽かぬかも

味原宮とは天平十六年二月から翌年五月まで聖武天皇の皇都であつた難波宮の別名であるが、ここで歌われた宮が皇都時代のそれなのか、それとも行幸先の離宮なのか、〈難波の宮にして作る歌一首〉という題詞だけでは、にわかに判断し難い。しかし〈わご大王の あり通ふ〉という一節からすれば、後者であると考えていいだろう。人麻呂長歌からの表現上の影響があらわな歌であるが、対句を駆使した様式的な構成は、これが寿歌として〈晴れ〉の場で歌われたことをうかがわせる。〈見まく欲る〉に関して注目したいのは、これが〈見る人の 語りにすれば 聞く人の 見まく欲りする〉という対句の中に封じ込まれている点であり、さらにこの長歌の主題部たる結句には〈見れど飽かず〉という人麻呂の創出した寿詞が措かれている点である。この対句は明らかに讚美表現ではあるが、対句に封じ込まれているというのは、つまり〈見まく欲る〉が〈語りにすれば〉という句と等価程度にしか扱われていないということであつて、

ここでは〈見れど飽かず〉より軽い位置にあるということになる。人麻呂の系譜に連なる宮廷歌人、田辺福麻呂は離宮讃歌を詠進するに際して、その総括的寿詞として〈見れど飽かず〉を選び取ったわけである。こうした事実には端的にうかがえるように、〈見まく欲る〉は13のような公的な寿歌の主題を担う表現とは見なされていなかったのである。〈見が欲し〉から変成した〈見れど飽かず〉と〈見まく欲る〉との相違が典型的に現れた例であろう。

国（土地）を対象とした用例四例中、次の二首二例などには興味深い点がある。

14馬並めてみ吉野川を見まく欲りうち越え来てそ瀧に遊びつる

22見まく欲り来しくもしく吉野川音の清けさ見るにともしく

吉野および吉野川を詠んだ歌には〈見る〉という行為を取り込んだ表現がかなり目につく。例えば、掲出した14と22の前後にも次のような吉野川の歌が並んでいる。

今しくは見めやと思ひしみ吉野の大川淀を今日見つるかも（作者未詳7・一一〇三）

音に聞き目にはいまだ見ぬ吉野川六田の淀を今日見つるかも（作者未詳7・一一〇五）

馬並めてうち群れ越え来今見つる吉野の川を何時かへり見む（人麻呂歌集・9・一七二〇）

苦しくも暮れぬる日かも吉野川清き川原を見れど飽かなくに（人麻呂歌集・9・一七二二）

吉野川川波高み瀧の浦を見ずかなりなむ恋しけまくに（人麻呂歌集・9・一七二二）

河蝦鳴く六田の川の川楊のねもころ見れど飽かぬ川かも（人麻呂歌集・9・一七二三）

古の賢しき人の遊びけむ吉野の川原見れど飽かぬかも（人麻呂歌集・9・一七二五）

人麻呂歌集の歌に〈見れど飽かず〉が集中していることに注目されるが、この詞章の対象とする宮や国（土地）にそもそも吉野が多いのである。私はこれを〈見れど飽かず〉の万葉最初の用例である人麻呂の吉野讃歌（1・三六、三七）

が方向づけしたものと考えているが、吉野讃歌に登場したこの詞章は先述したように、〈見が欲し〉の内包する古代呪術的幻想を擬制的に継承した新たな寿詞であつて、そこには「〈見る〉」ことのタマフリ」呪術が揺曳しているものと思われる。また吉野の地は、天武・持統天皇以後における律令・神話体系を背景にした強大な古代天皇制発祥の地とも考えられ（天武天皇の吉野の誓盟や持統天皇の在位中三一回到及ぶ吉野行幸などは、こうした発祥地幻想とは不可分ではないだろう）、〈神ながら神さびせず〉現人神、天武・持統両天皇の神威に満ちた地として万葉人には觀念されていたのではなかつたか。こういう観点から考えると、14・22の〈見まく欲る〉には、「見る」ことのタマフリ」の残照を想定することが出来るかも知れない。同じことが次の、筑波山を対象とした用例についても指摘出来る。

23 衣手 常陸の国 二並ぶ 筑波の山を 見まく欲り 君来ませりと 熱けくに 汗かきなげ 木の根取り 嘯き登り
 峯の上を 君に見すれば 男の神も 許し賜ひ 女の神も 幸ひ給ひて 時となく 雲居雨降る 筑波嶺を 清に照
 らして いふかりし 国のまほらを つばらかに 示し賜へば 歎しみと 紐の緒解きて 家のごと 解けてそ遊ぶ
 うち靡く 春見ましゆは 夏草の 茂くはあれど 今日の樂しさ

〈検税使大伴卿の筑波山に登りし時の歌一首〉と題詞にある歌だが、〈大伴卿〉には大伴旅人・安麻呂・道足・牛養といった人々が比定されており、定説を見ない。ここで〈見まく欲る〉の対象となつてゐるのは筑波山だが、その主体は作者ではなく作中の〈君〉（＝大伴卿）である点に他の用例と異なる特色があるかも知れない。歌の内容には国見歌的な色彩もあるが、表現形式には、概して公的な長歌における整然たる様式性が乏しい。常陸国の神山たる筑波山を都からはるばる訪れた検税使が〈見たい〉と所望すると、筑波山の神はそれを歓迎し、歎楽のひとつきを用意してくれたというほどの歌意であつて、おそらく検税使を囲む国司主催の宴席などで披露されたものであろう。ここに中央対地方や〈天つ神〉の使者対〈国つ神〉の図式を読み取ることは容易だろう。つまり〈天つ神〉の使者たる検税使は、その資格

において〈国つ神〉筑波山に歓迎されるのであり、国見を許されるわけである。だが、そこには服属する〈国つ神〉のイメージだけが描かれているわけではなく、讚美される〈国つ神〉像も描かれているはずである。その部分を担うのが、この長歌では、まず〈見まく欲る〉という詞章であると私には考えられる。当該詞章のある五句目は、例えば〈見が欲しく〉という句に措き変えることも十分に可能なのである。

以上のように、〈見まく欲る〉は、宮讚め・国（土地）讚めの文脈中にもわずかながら用いられたという事実を確認しておきたい。そこでは〈見まく欲る〉は伝承寿詞〈見が欲し〉の嫡子として機能しているといえよう。

物を対象とする六つの用例は次のようである。

9 うつたへに籬の姿見まく欲り行かむと言へや君を見にこそ

11 雲隠り行方をなみとわが恋ふる月をや君が見まく欲りする

16 梯立の倉梯山に立てる白雲 見まく欲りわがするなべに立てる白雲

21 秋山にもみつ木の葉の移りなばさらにや秋を見まく欲りせむ

25 月夜よみ鳴く雀公鳥見まく欲りわれ草取れり見む人もがも

26 見まく欲りわが待ち恋ひし秋萩は枝もしみみに花咲きにけり

9 は相聞であるが、〈見まく欲る〉の対象は表現上〈籬の姿〉ということになる。しかし歌意からすると、実際の対象は〈君〉である。これも相聞的文脈中の用例である。11は『萬葉集全注』で吉井巖氏が推定しているように、本来は〈夕闇は道たづたづし月待ちていませわが背子その間にも見む〉（4・七〇九）という同一作者の歌の前に置かれていたはずであって、11では、恋人に〈あなたも私と同じく月を見たいと思っっていますか〉と意味ありげに尋ね、七〇九番歌ではじめて〈帰り道は暗いから、月が出るまで私の所にとどまっています〉と本音を明かす、といった趣の連作だった

ろう。この場合の〈月〉は単なる相聞の景物と見なすべきであって、讚美の対象となるような特別な意味合いは読み取れない。16はこの後に続く二首の旋頭歌（二二八三、二二八四）とともに連作構成を取る相聞と私は別稿で推定したことがあるが、それによれば〈見まく欲る〉の対象〈白雲〉は過去の恋人のイメージを託したものと考えられる。以上三例の〈見まく欲る〉は相聞的用法に入れるべきものである。後半の三例はいずれも自然を対象としており、巻八や巻十の季節雑歌と相聞との間に見られる表現の相互交流がこの〈見まく欲る〉にも指摘出来るかと思う（21は巻八、25・26は巻十）。自然観照の視線を内包する、これらの歌にはすでに呪術性は想定すべきではないだろう。万葉においては呪術的幻想を擬制化した〈見れど飽かず〉が次第に歌語化し、勅撰和歌集時代にも用いられたが、その多くが植物を対象とする歌に取り込まれて行ったという事実がある。¹⁹〈見まく欲る〉の用法の相聞から自然雑歌への広がりにも、そういう事実が参考となるかも知れない。

注

- (1) 拙稿「見が欲し」考」〔まひる野〕第四一卷第九号、昭53・9）、同「見れど飽かず」の考察——その意味と用法を——めぐって」〔美夫君志〕第三一号、昭60・10）
- (2) この歌謡を含むイワノヒメ物語は仁徳記・紀ともに収録されているが、原型は古事記にあると考えられる。さて、その古事記において記58は次のような本文文脈中に置かれてある。自分の留守中に仁徳天皇が八田若郎女を入内させたことに立腹した皇后イワノヒメは難波高津宮に帰らず、山城川を船で遡行して行く。山城から今度は南に向かい、奈良山の北麓で当該歌謡を歌う。しかし歌詞には「青土よし 奈良を過ぎ 小橋 大和を過ぎ」とあり、明らかに本文と矛盾するのである。また葛城氏の居城を「葛城高宮」と歌うのも判然としない。
- (3) 『記紀歌謡評釈』一四三―一四四頁
- (4) 『古代歌謡全注釈（古事記篇）』二四六頁
- (5) これを独立歌謡と認定しない立場をとる土橋寛氏も「この歌の背後に国讃め性格の宮讃め歌が存在していたことは確かだ、

- 「見が欲し」の慣用語の古い用例であり、万葉歌人の宮廷讃歌の源流をなすものといえる（『古代歌謡全注釈』（古事記篇）三四七―三四八頁）と述べている。
- (6) 例えば出雲国風土記に、国内を巡行する神、布都努志命が山国郷に来て（是の土は、止まなくに見まく欲し）と述べたという記事がある（意宇郡山国郷）。
- (7) 注（1）の拙稿「見れど飽かず」の考察——その意味と用法をめぐって——」
- (8) 『古代歌謡と儀礼の研究』二六五―二九四頁に詳しい。
- (9) 注（1）の拙稿「見れど飽かず」の考察——その意味と用法をめぐって——」
- (10) いわゆるク語法の典型的な例であり、現代の諸注釈における語釈・口語訳もほぼその範囲で行われている。
- (11) 注（1）の拙稿「見れど飽かず」の考察——その意味と用法をめぐって——」および同じく拙稿「見れど飽かず」の考察——中古・中世における変容——」（『淑徳国文』第三〇号、平1・3）においても、この四項目に対象を類別した上で検討を加えた。
- (12) 当該歌の題詞には（巫部麻蘇娘子の歌二首）としか記されておらず、これだけでは必ずしも大伴家と結びつけられない。しかし当該歌の所属する巻四は大伴坂上郎女・家持を中心とする大伴一族およびその周辺の人物の作歌が大半を占めている。また、当該歌の直前七〇〇―七〇二番歌は大伴家持と河内百枝娘子との贈答、直後七〇五・七〇六番歌は同じく家持と童女との贈答、さらにその後の七〇七・七〇八番歌は粟田女娘子の家持に贈る相聞である。こうした事実から当該歌も巫部麻蘇娘子が家持に贈った歌であり、それを家持が記録していたものと考えられる方が自然であろう。
- (13) 『萬葉集の歌人と作品 上』一九二―一九三頁
- (14) こうした和歌表現の様式や構造に関する問題は、土橋寛・鈴木日出男・古橋信孝氏等の論考に詳しいが、私は特に歌の共同性を考える手掛かりとして歌語の問題を、現在、連載中の拙稿「歌における他者」の次稿において論じる予定である。なお、「歌における他者」(1) 1 (3) は、それぞれ『中京短歌』第一号（昭61・7）、同第二号（昭62・4）、同第三号（平1・4）に掲載されている。
- (15) 〈見まく欲る〉は〈見まく欲しさ〉をも含めて、古今・後撰・拾遺（拾遺および拾遺抄）・新古今・続後撰・玉葉・続後撰・続後拾遺・風雅の九勅撰和歌集に二〇首二〇例（万葉集の再録は四首）が数えられる。
- (16) 〈見が欲し〉は勅撰和歌集には全くその用例が見られない。しかし時代もずっと下って、江戸古学派の合同歌集『八十浦之玉』

(文政二年から天保七年にかけて中・上・下の順で刊行)に八首八例が突発的に現れる。

(17) 注(1)の拙稿「(見れど飽かず)の考察——その意味と用法をめぐって——」

(18) 拙稿「人麻呂歌集旋頭歌考」(『文藝と批評』第四卷第九号、昭53・1)。なお、本稿は日本文学研究資料新集2『万葉集 人麻呂と人麻呂歌集』(平1・10、有精堂)に再録されている。

(19) 注(11)の拙稿「(見れど飽かず)の考察——中古・中世和歌における変容——」。ただし、「見れど飽かず」の植物をはじめとした自然に関する用例には、万葉以来ほとんど観照的なものや描写的なものがない。この理由については「見れど飽かず」に関する前掲二本の拙稿を参照されたい。

(『記紀歌謡・風土記・万葉集・古今和歌集からの引用は、すべて岩波古典文学大系本に従った。』)

(しまだしゅうぞう・助教授)